

令和 3年度 日本小動物獣医学会(近畿)

一般講演プログラム A 会場

演題番号：A2

ウサギ(*Oryctolagus cuniculus*)の胃捻転の1例

○上田憲吾¹⁾、佐々井浩志¹⁾、泉 有希¹⁾、植田茉莉香¹⁾、辻 綾佳¹⁾、上寫紗綾¹⁾、藤原研恵¹⁾、古家 優²⁾、田中美有³⁾、井澤武史³⁾、桑村 充³⁾

¹⁾ 北須磨動物病院・神戸市、²⁾ 大阪府大獣医内科、³⁾ 大阪府大獣医病理

1. はじめに：ウサギの急性腹症の類症鑑別には、胃腸のうっ滞性疾患をはじめ、異物や毛球、膿瘍、腫瘍形成に起因する小腸閉塞、消化管穿孔や腹部臓器捻転が考慮される。ウサギでは複数の臓器において捻転性疾患が確認されており、我々は小腸、肝葉、子宮、膀胱などの捻転例を報告してきたが、いずれも留意すべき急性疾患である。イヌで好発する胃拡張-捻転症候群は胃の軸捻転を特徴とする致死率の高い急性腹症の1つであるが、エキゾチック伴侶動物における胃捻転はフェレットとモルモットにおいて僅かに報告されているのみである。今回我々は、急性の食欲不振を示したウサギにおいて胃捻転の発生を確認し、治療方法について検討した。

2. 材料および方法：症例はウサギ(*Oryctolagus cuniculus*)、ホーランドロップ種、未去勢雄、3歳5カ月、1.7 Kg。2日前からの便量減少、元気・食欲の消失、飲水量減少を主訴に救急外来として上診した。

3. 結果：第1病日、消化管うっ滞と仮診断し、対症療法を行ったが、第2病日において、食欲不振が持続し、著しい活動性の低下が認められたため、各種臨床検査を実施した。血液検査では、著しい肝酵素値の上昇と軽度のBUN上昇、血小

板数の軽度減少、黄疸が認められ、X線検査では胃ガスの変位像と腹部ディテールの低下、腹部超音波検査では肝葉辺縁の鈍化、肝静脈怒張、腹水貯留等の所見が得られた。以上の検査結果ならびに急性経過を示していることから全身麻酔下で緊急開腹手術を実施したところ、上腹部に変位した胃と牽引された脾臓が腹水と共に確認された。肝尾状葉の一部は絞扼され強い充うっ血を呈していた。胃は拡張し、体軸に対して時計回りに180°捻転していたため、慎重に反転復位を施し、周辺消化管に異常が無いことを確認後、胃切開によって内容物を除去して常法通り閉腹した。術後2日目に貧血、腎機能低下を認めたが、術前からの輸液治療に加えて輸血などの治療により第5病日には各種検査値が改善し、第6病日に退院とした。以後症状の再発は無く、良好に推移している。

4. 考察および結語：本症例はウサギにおける胃捻転の初の報告であり、ウサギの食欲不振、急性腹症の鑑別リストに「胃捻転」を加える必要性が示唆された。本疾患の診断には、一般身体検査や各種臨床検査情報が有用で、早期の外科的介入が必要であると考えられた。